

目次

- 01 「目をつむる写真展」に寄せて・メッセージ
- 02 会場のようす
- 03 目をつむることば・目をつむるスタジオ
- 04 協力者の声
- 05 パブリシティ































「目をつむる写真展」に寄せて

成実憲一にとってアートとは、作品を作ることではなく、人と人をむすぶ新たな関係を作る営為に他なりません。たとえばそれは、障がいのある人たちの表現を発信するアートギャラリーの開設や、公共施設の小さなスペースを間借りしての「一畳美術館」といった実践、そしてこの「目をつむる写真展」です。またその変遷とは、「障がい者の表現」を特別視せず、社会を成り立たせている多様な人々の輪の中に、ごく自然な形でつなげて行くための一連の試行と捉えることができるでしょう。

「目をつむる」ことは誰にでもできるし、カメラで他者を撮影することも特別なことではありません。成実はむしろ、「誰もができる」また「特別でない」ことに重きを置いているようです。この活動を始めた2015年の段階では、展示された写真の多くは成実自身の撮影によるものでした。しかし、近年は、参加者同士「撮り合いっこ」した写真が半数近くまでになったようです。そのことで写真としてのクオリティーが揺らぎ、時間も手間もかかるのですが、成実による丁寧なサポートと、誰かと誰かが「撮り合いっこ」するという関係性のなかで、えもいわれぬ豊かな表情が生まれてくるとのこと。

「つむる、つながる、つたわる、おもひ。」 成実の呼びかけに応えた人々のさりげない仕草は、かけがえのない生命 (いのち) のポリフォニーとなって来場者をつつむことでしょう。

白井 嘉尚 静岡大学 名誉教授

メッセージ

ここにうつっているのは、年齢、性別、国籍、障がいの有無を超えた、およそ570人の人々です。

私が静岡で撮影した写真、また静岡にゆかりのある人たちが自分たちで撮影したもの。そして参加者がお互いに「目をつむる写真」を"撮り合いっこ"するワークショップ『目をつむるスタジオ』で撮影されたものです。『目をつむるスタジオ』は昨年から今年にかけて、計4回実施することができました。そしてそこでは撮る側・撮られる側という境界のない関わりを大切にしました。

目をつむると、普段見られない表情が浮かび上がります。また、目をつむることは他者との寛容的な関わり(許す) を意味します。さらに、目をつむることは自分自身の心に目を向けることをも意味します。

「目をつむること」に思いを巡らせながら、本展を通じて、人との関わりを見つめ直すきっかけになったり、見えない「つながり」を感じたり、新たな「つながり」が生まれることを願っています。

成実 憲一

一般社団法人ヴァリアスコネクションズ 理事長

会場のようす



《目をつむる写真》 インクジェットプリント 210mm×297mm 294枚



和紙にインクジェットプリント 420mm×297mm 11点

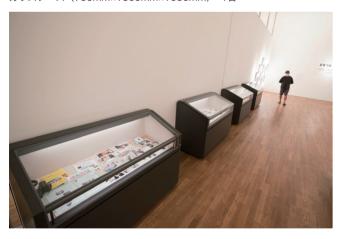








《目をつむるスタジオの記録と記憶》 ミクストメディア ガラスケース (700mm×1500mm×1050mm) 4台















《静岡県内の特別支援学校で撮影された「目をつむる写真」のスライドショー》 98枚 8分28秒

協力 静岡県立静岡北特別支援学校、静岡県立中央特別支援学校、 静岡県立袋井特別支援学校 磐田見付分校、静岡県立藤枝特別支援学校、 静岡大学教育学部附属特別支援学校

目をつむることば

「目をつむる写真」を撮るとき・撮られるとき、また自分や他の人の写真を見て感じたことを参加者の中から11名の方に聞き取りをし、そこ からキーワードになるシンプルな『ことば』を抽出しました。

この11名の方は、年齢、性別、国籍、障がいの有無など様々です。「目をつむることば」にはあえてお名前を記していません。誰が何を発言 したのかよりも、『ことば』そのものに触れていただきたいと思ったからです。

お一人おひとりの『写真』とともに、「目をつむる」ことにおもひ巡らせてみませんか?

編集協力: 小西 秀和

- 01.「目をつむる」と、すべて人々が争いごとを放棄している表情に見えます。まさに「目をつむる」とは、戦争放棄のもっと簡単な手段ではないでしょうか。
- 02. 目をつむる行為は、目の前のカメラを向ける相手のことを信頼しないとできないことだ。
- 03. 目をつむって、「自分」と会話する。
- 04. 変な顔になってないかな?
- 05、家族4人で写っている写真が他にないなぁ。
- 06. 無防備で、取り繕えなくて、素直な気持ちになりました。時折目をつむって、自分を解放してあげたいな。
- 07. 心を穏やかにする時間。
- 08. 空が見えた。上手くいくようにお祈りしてた。
- 09. コミュニケーションの方法は、言葉やアイコンタクトだけではない。
- 10. 普段の顔と違い、一瞬誰か判らない。
- 11. 相手の心に近づき、そっとふれる。さわるのではない。ふれるのである。



目をつむるスタジオ

『目をつむるスタジオ』とは、参加者がお互いに「目をつむる写真」を"撮り合いっこ"するワークショップです。

この『目をつむるスタジオ』は、グランシップ(2020・2021)、特定非営利活動法人ひまわり事業団(2021)、静岡市番町市民活動センター (2021) で計4回実施しました。

お互いの社会的な立場を超えて、撮る側・撮られる側といった一方向の関係ではなく、境界のない関わりを通して、お互いの存在を認め合い 輝いている姿が「目をつむる写真」には写り込んでいます。







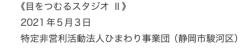
《目をつむるスタジオ 1》

令和3年につなげるための「グランシップ 誰もがWonderfulアート」ワークショップ 2020年9月6日

グランシップ (静岡市駿河区)

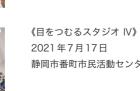












《日をつむるスタジオ III》 グランシップこどものくに~まんまるころころ~ 2021年5月4日 グランシップ (静岡市駿河区)



静岡市番町市民活動センター (静岡市葵区)

世界をひらくヒントがある

平野 雅彦

静岡大学 人文社会科学部 客員教授

思い出してみたい。北欧神話に登場する詩文の神であり吟遊詩人のパトロンでもあるオーディンが片眼であることを。柳田國男が言及した風・天候を司る神、一目連(いちもくれん) もまた片眼であることを。さらにはギリシア神話の予言者テイレシアスが全盲であることを。つまり古今東西の神々は視力を失うことで、より世界を見通す力を得たのである。

動物の眼球は、皮膚由来のもの(無脊椎動物)と中枢神経系の脳由来のもの(脊椎動物)とに大別される。なるほど、成実憲一の導きによって眼をつむることは、われわれ脊椎動物が皮膚由来のプリミティブな機能を取り戻す行為であり、全身を眼にしながら対象と向き合うことなのである。

成実はさらに、こうも云う。「つむる、つながる、つたわる、おもひ。」。つむることで、つながる。つむるからこそ、つたわる。一見矛盾したこの言海にこそ、混沌とした世界をひらくヒントがある。きっと。

みんなが互いに輝いた「目をつむる写真ワークショップ」

李 恵順

特定非営利活動法人ひまわり事業団 スタッフ

目をつむる写真展の会場に足を踏み入れ、ズラッと並んだ写真を目にした時、仲間の笑顔やいつもとは違った表情に少し圧倒され、そして ワクワクしたことを思い返しています…。

障がいのある皆さんが仲間や家族、スタッフをモデルに自分で写真を撮る機会を提供して頂けたことが何より嬉しくて、今回ワークショップを受け入れさせて頂きました。

初めてカメラに触れたその短い時間に、皆さんが目を輝かせ積極的にシャッターを押す姿に引き込まれ、私も自然と被写体になってしまいました。目をつむった自分を他人に見られることは、心の中を見透かされ、隠していたものが暴かれるような気がして、撮られることに多少の躊躇や緊張があったのに。写真には何ら緊張や隠し事の無い、素の私が写されていてびっくり!

このワークショップは、私にとってカメラの向こうで私を見る皆さんへの信頼と自分を委ねられる心地よい時間だったと改めて思いました。 さらに、障がいのある皆さんが今までと同じように、初めてのことでもサポートを受けながら「やればできる」と自己肯定を積み重ねる素敵 な体験の機会となったことも加えて伝えさせていただきます。

#知ることから始めよう #ごめんなさい #ありがとう

五味 響子

静岡市番町市民活動センター・センター長

ぶしつけに「なぜ目をつむる写真なのでしょうか」とトーク会を開いたり、「目をつむるスタジオを開きましょう」とカメラを何台も持ってきていただいたり、「数年前に撮影したご家族をまた撮るんです」と聞きつけて現場に押しかけたり・・・ごめんなさい。ずいぶん図々しいわたくしでした。

「子どもの寝顔を見て思いついたんです」と伺いました。「話しかけるところから始まるんです」とは、横で拝見し、トーク会にご参加の方々と一緒に話しかけるところから始まる撮影を体験し、"目をつむるスタジオ@番町センター"でも、そこから始まるふれあいも実感できました。誰もがお互いに撮影者にも被写体にもなれるって楽しい気持ちを生む!ということも。

でも、8月末からのグランシップの『目をつむる写真展』の会場に行くまでわからなかったことがありました。それは、モノクロームの同じサイズの写真となって迫ってきた、いろいろな人のしあわせ、あたたかさ。

わーとしか言いようのない驚きでした。目をつむる人って、あったかいんだ。成実さんがお話してくれた「つながる思い」を誰もが感じているからこんなにあったかいんだなぁ~。

日頃からつながりの場をつくることを目指している番町センターの季刊誌『ばんたび』に、頭でっかちなことを書いて恥ずかしかったなぁ。「目をつむる写真を撮る時、それは相手にふれることなのである」なんて。あ~恥ずかしい。なまみのたくさんの人の目をつむる顔に、モノクロームのたくさんの写真に、わたくしが書いた文章なんてかんぜんに負けました。

成実憲一の『目をつむる写真展』に完敗。そしてかんぱ~い(乾杯)!!!

パブリシティ

新 聞 ●「静岡新聞」 2021年8月29日朝刊

●「朝日新聞」 2021年9月12日朝刊

Fレビ ●「NHK静岡 たっぷり静岡」 2021年9月7日

紙媒体雑誌 ●「ひまわり通信」特定非営利活動法人ひまわり事業団 2021年6月

●「ばんたび」静岡市番町市民活動センター 2021年7月1日



「朝日新聞」2021年9月12日朝刊



「静岡新聞」2021年8月29日朝刊































グランシップ 誰もがWonderfulアート

会 期: 2021年8月28日-9月12日

会場: 静岡県コンベンションアーツセンター / グランシップ 6階展示ギャラリー

主 催: 公益財団法人静岡県文化財団、静岡県

後 援: 静岡県教育委員会、静岡市教育委員会、NHK静岡放送局

目をつむる写真展 -つむる、つながる、つたわる、おもひ。

企 画: 一般社団法人ヴァリアスコネクションズ

協 力: 静岡市社会福祉協議会、静岡市番町市民活動センター、特定非営利活動法人ひまわり事業団、 認定NPO法人活き生きネットワーク、おやじサロン "ギャルソン"、遠州横須賀倶楽部、深谷孝、 するが紅トマHIKO☆星隊、富士市若者相談窓口 ココ☆カラ、木村雅章、白岩俊正、松井照子、小西秀和、 泉栄子、ウイジャヤ・フェリックス、植田家族、小林瑛美、五味響子、成毛直紀、花井大輔、原田陽子、 平野雅彦、深野裕士、白井洋子、つみきのそのさん&そのママ、宮城嶋開人、望月雄介(順不同、敬称略)

展示記録

発行日: 2021年12月16日

編集・デザイン・発行: 一般社団法人ヴァリアスコネクションズ

印 刷: 株式会社プリントパック

